

高等学校事情

第9回 四国エリア

今号では四国エリアの香川県と愛媛県の動きをレポートする。香川県は、近畿・中国エリアへの交通の便が良く、県外進学者が多いのが特徴。各高校は授業等において一層の特色づくりを図りながら、県全体の学力向上をめざす。愛媛県は、6つのブロック別に県立高校のネットワークを構築し、教育力向上に取り組んでいる。

香川県



地元で大学が少なく 県外志向が顕著

文部科学省「2011年度学校基本調査」によると、香川県の18歳人口は9449人。高校数は公立32校、私立10校の合計42校（特別支援学校を除く）で、そのうち14校が高松市内に集中している。生徒数は公立約1万9500人、私立約6000人（定時制を除く）の合計約2万5500人である。県の面積は全国で最も小さく、もともと

高校数・生徒数が少ない。2000年以降に取り組んでいる高校再編事業では、計画的に学校の統廃合を進めるとともに、学科改編を行っている。将来、急激な少子化が予想される地域もあるが、香川県教育委員会は「教育環境の充実と高校や地域の活力維持を考えた再編事業を検討する」としている。

大学等進学率は全国25位の51.1%だが、地元大学進学率は17.2%で全国41位。最近10年間は14~17%台で推移しており、地元進学者が非常に少ない。理由の一つとして県内の4年制大学数が国立1校、公立1校、私立3校と少なく、進学を受け皿が小さいことが考えられる。特に工学部などの理系学部が少ないため、志望学部によっては県外進学を選択肢に入れることが必然となっているようだ。「香川県は、近畿エリアや中国エリアとの交通の便が発達している。そのため、県外に出ることに対してハードルが低い。特に近畿エリアには特色のある大学が多く、国公立志向を主としながら

も、関関同立といった私立大学への進学者もめだつ」と県教委は言う。

高校の現状① 改革の取り組み

特色ある教育活動を 指定校施策で後押し

県教委は、2006年度から魅力ある学校づくりの一層の推進を目的とした「きらめくかがわの高校づくり推進事業」に取り組んでいる（図表2）。この中に2011年度からスタートした新規事業が2つある。

1つは、全県立高校を対象とする「魅力ある高校づくりのための学校独自プラン」である。「環境改善活動を通じた学力・人間力向上（高松桜井）」や「高度な資格取得を目指した専門教育の充実（坂出商業）」など、学力向上、職業観育成、地域連携などについて各校が特色を生かしたテーマを掲げ、独自の学校づくりを進める。

もう1つが、「魅力ある授業づくり」の取り組み。これは「理数教育の充実と普及」「道徳教育の実践」「言語活動の充実」「外国語教育の研究」「伝統・文化に関する教育」の5テーマについて、効果的な指導方法を研究開発し、公開授業を実施するもの。現在は6校が指定されている。

「言語活動の充実」指定校の高松西高校は2009~2011年度に文部科学省の学力向上実践研究推進校として、生徒の学力向上支援や教員の指導力アップに取り組んできた実績がある。また、「理数教育の充実と普及」指定校の三本松高校は、2003年度から9年間にわたりスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校として先進的な理数教育に取り組んできた。今回の県の指定は、各高校がこれまで取り組んできた研究・課題のさらなる発展も目標としている。県教委は「各指定校の学力向上に対する成果は徐々に出ていく」と評価し、今後も取り組みを継続できるよう支援を続けるという。

高大連携では、香川大学との協定によって、2003年度から公開授業・体験授業を県内の高校生が受講できるようにし、進路選択を支援。夏季休業中に実施する体験授業には毎年100人程度の高校生が参加するが、平日の夕方から開講される公開授業は参加者の数が伸び悩んでいる。高松市外の生徒には通にくいという事情に加え、キャリア教育として、バスで大学訪問を行う高校や、オープンキャンパスに参加する生徒が増えたことも、原因と考えられる。県教委は「高大連携が活性化すれば地元大学進学率の向上につながるはず」と、連携の継続的な支援に力を入れていく方針だ。

高校の現状② キャリア教育

専門高校の支援で 大学進学も視野に

キャリア教育の充実事業としては、2011年度から「ナンバーワン専門高校プロジェクト」がスタートした。産業教育の活性化を目的とし、産業教育

図表2 2012年度「きらめくかがわの高校づくり推進事業」の概要

| 事業名 | 事業内容 |
|----------------------|--|
| 魅力ある高校づくりのための学校独自プラン | 魅力ある高校づくりをより一層推進するため、各校がその特色を生かしたテーマで学校づくりを進める。全高校を対象とする。 |
| 魅力ある授業づくり | 教育課題の解決のため、6つの高校が5つのテーマで効果的な指導方法を研究開発し、公開授業を実施する。 【取り組み】 三本松「理数教育の充実と普及」、志度「道徳教育の実践」、高松西「言語活動の充実」、高松北・坂出「外国語教育の研究」、琴平「伝統・文化に関する教育」 |
| 体験入学の充実 | 中学生が、各高校の特色を理解したうえで入学し、教育活動に取り組めるよう、全高校が体験入学を実施する。 |
| 中学生への高校説明冊子配付 | 中学3年生向けの「香川の高等学校」と2・3年生向けの高校紹介リーフレット「架け橋」を作成し配付する。 |
| シラバスの作成 | 各高校で年間の授業内容や評価方法を示したシラバスを作成・配付。生徒からの授業評価や公開授業を実施する。 |

に関する全国規模のコンテストや研究発表会で日本一をめざす高校の活動を支援する。2012年度は7校を指定した。

指定校の中には、専門学科に加えて、進学クラスや特別進学コースを設置している高校もあり、3年間で培った専門知識とスキルを生かして国公立大学に進学する生徒もいる。県教委によると、近年は専門高校でも大学進学をめざす生徒が増え、この施策はその後押しにもなりそうだという。「専門高校の生徒のモチベーション向上や、新しいことにチャレンジする意欲に一役買っているのは間違いない。明確な目標を持って大学進学を志す生徒が今後さらに増えるのでは」と期待を寄せる。

そのほかのキャリア教育事業としては、産学官が人材育成で連携するコンソーシアムを設立。また、職業人を講師に迎えた授業の開講などにも力を入れている。

進路指導の特徴

研究指定校の利点を 生かした手厚い指導

香川県には、国や県の研究校として

の指定をきっかけに、進学指導をより強化し、大学進学の実績を上げていく高校が多い。2011年度からSSHに指定された観音寺第一高校では、55分×6時間授業と毎朝15分間の早朝学習を導入している。各教科の発展的内容を講義する土曜日の「樟樹セミナー」や、東京大学、大阪大学と連携したeラーニング「金曜特別講座」なども行われている。理数科は生徒の意欲高揚と学力伸長に向けて、少人数授業体制（定員30人）を整え、きめ細かな指導を実施している。

同じくSSH指定を受けている高松市立の高松第一高校は、文理コースに加え、難関国公立大学への進学を目標とした文系の国際文科コースと、理系の特別理数コースを設置している。両コースとも、夏季休業中に2泊3日のセミナー合宿を実施。1日10時間以上の勉強時間を設け、学習習慣の定着を図る。

進学指導に特色のある私立高校としては、中高一貫の香川県大手前高校が挙げられる。2年次までに高校の教材をほぼ終了させて受験勉強の基礎を固め、3年次は受験に向けて実践的な独自教材を使用。生徒の希望進路に沿った丁寧な個別指導が行われている。2011年度卒業生の国公立大学合格率は70.6%である。

※学校基本調査報告書を基に進研アドが算出。
※大学等進学率は、大学・短大の通信教育部への進学者を含む。過年度卒業者を含まない。
※地元大学進学率、地元短大進学率は過年度卒業者を含む。



進路指導の特徴

目標を明確にし 国立大学合格を支援

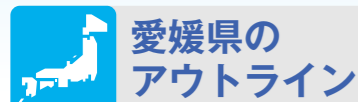
県内の公立高校には、生徒一人ひとりの進路志望や学力の把握、入念な面談など、指導に熱心な高校が多い。

創立130年以上の伝統校である松山東高校は、東高マニフェストを策定し、難関大学合格者の数値目標を掲げ、「授業で勝負」を合言葉にしている。

同校は学力向上チャレンジハイスクール事業指定校で、理数教育の充実をテーマに理工・医歯薬系志望者のための指導内容改善に取り組む。また、外部講師を招いた難関大学説明会や、卒業生によるキャンパス見学会を開催している。3年次には理系・文系に分かれた難関大学別の夏季特別補習を行うなど、生徒の進路意識を高め、モチベーション維持に努めている。

進学指導に特徴のある私立高校としては、中高一貫校の愛光高校が挙げられる。関西や九州など県外からの入学者も多く、西日本屈指の進学校だ。英語・数学・国語の3教科を基礎教科として、通常の定期試験のほかに2教科・3教科テストを実施。生徒一人ひとりの理解度を細かく把握している。2年次3学期から3年次2学期にかけては、希望者に放課後特別補習を行い、センター試験や2次試験の出題傾向を分析して、生徒のレベルに合わせた対策を指導している。2012年度入試では、東京大学22人、京都大学7人、慶應義塾大学25人、早稲田大学41人等の合格者を出している。

愛媛県



愛媛県の アウトライン

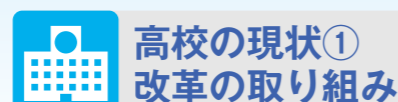
地域で異なる進学先 近畿エリアも視野に

文部科学省「2011年度学校基本調査」によると、愛媛県の18歳人口は1万4501人で全国28位。四国4県で最も多く、唯一の1万人台となっている。高校数は国立1校、公立55校、私立12校の合計68校(特別支援学校を除く)、生徒数は国立360人、公立2万8340人、私立約7900人(定時制を除く)の合計約3万6600人である。

近年、大学等進学率は50%前後で推移している。2011年度は54.1%で全国18位だが、地元大学進学率は31.8%と低い。香川県同様、県内の4年制大学は5校(国立1校、公立1校、私立3校)と少ないこと、松山市近辺に集中していることなどが理由として挙げられる。

愛媛県は東予・中予・南予の3地域に区分される。松山市を含む中予は、

地元の愛媛大学や松山大学を志望する生徒が多いが、東予は香川や岡山、近畿にも出やすく、中予よりも県外志向が強い。交通の便が悪い南予は自宅通学ができないため、県内でも県外でも同じという意識がある。



高校の現状① 改革の取り組み

生徒・教員双方の レベルアップをめざす

愛媛県教育委員会は、2010～2012年度の3年計画で「えひめ学力向上チャレンジハイスクール事業」に取り組んでいる。新学習指導要領の柱である「言語活動の充実」「理数教育の充実」「職業教育の充実」の実践研究を推進する高校を指定し、その取り組みを支援するものだ。

中でも、大学進学や科学系人材の育成につながる「理数教育の充実」には、西条、松山東、松山北、松山中央、宇和島東の5校を指定している。各校は、大学の理学部や医学部との連携、企業の先端施設見学などに取り組み、生徒の学力や意欲の向上をめざしている。

人材育成を目的とした施策には、2011年度にスタートしたえひめ「高校生学力向上ネットワーク」構築事業がある。これは、近隣エリアの県立高校等が連携して生徒の学力向上をめざすもの。県立高校等を6ブロックに編

成し、それぞれにネットワーク委員会と拠点校を設置。大学による合同模擬授業や生徒の合同学習会、教職員の相互授業研修会など、ブロック内各校の課題に対応するための独自企画を立案・実施する(図表2)。若手教員や小規模校の教員にとっては、さまざまな指導法に触れることができ、刺激にもなるという。

県教委は、「各校が持っている進路指導のノウハウを共有することにより、一人ひとりに合った質の高い指導が可能になる。学力・指導力の全体的な向上につながるだろう」と、今後のネットワーク活用に期待を寄せる。

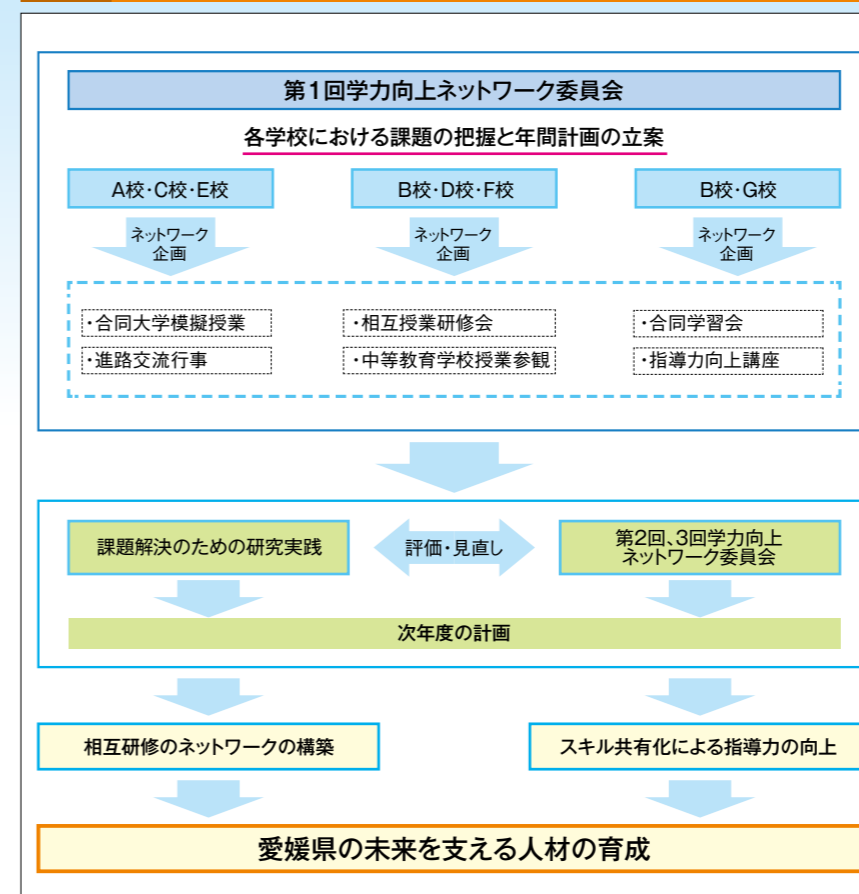
そのほかにも英語教育に関する2つの事業を推進している。

1つは、「英語が使える高校生」育成事業。英語を使ったコミュニケーション能力の基礎を身に付け、学習意欲を高める目的で「高校生英語スキルアップ合宿」と「高校生英語ディベート・コンテスト」を実施している。夏季休業中に2泊3日で行われるスキルアップ合宿では、英語指導助手とのコミュニケーション・プラクティスや英語劇、ディベートなどを行う。

英語ディベート・コンテストは、4人1組で参加するトーナメント方式。2011年度の第1回大会には9校10チームが出場した。スキルアップ合宿を経て参加した生徒も多く、2つの取り組みは連動している。

もう1つの事業が英語教育の指導力向上を目的とする「オールイングリッシュ実践リーダー養成事業」である。英語教育の中核を担う教員を育成するもので、10年以上の教職経験を持つ中堅英語教員30人を県教委が指名し、1年を通して英語ディスカッションやディベート演習などの研修を行う。スキルアップ合宿やディベート・コンテストにも運営やジャッジ、アド

図表2 えひめ「高校生学力向上ネットワーク」構築事業の概要



バイザーとして参加する。研修の成果は自校や近隣の高校で生かしてもらう。3年間の事業期間中に90人のリーダー育成をめざしている。



高校の現状② 再編整備

中等教育学校の開設で 県全体を活性化

愛媛県では2003年度から、今治東高校、松山西高校、宇和島南高校に中学校が併設され、東予・中予・南予の各学区で中高一貫教育がスタートした。1期生が高校に進学する2006年度に各中学校を閉校し、3校すべてが中等教育学校へと移行した。県教委は、「計画段階から中等教育学校への

移行を視野に入れており、よりきめ細かで柔軟かつ継続的な指導が可能になった」としている。

各校は在学6年間で2年ずつの基礎期・充実期・発展期に分け、各期の目標を設定し、系統立てた教科カリキュラムとキャリア教育に取り組んでいる。初の卒業生を出した2008年度以降、3校とも東京大学や京都大学などの難関国立大学合格者が出ており、地域や保護者からの期待も高い。松山西中等教育学校では、入試倍率が例年2、3倍の人気となっている。

私立では、2002年度に済美平成、2003年度に新田青雲が、それぞれ中等教育学校としてスタートしており、6年間一貫の中等教育学校が、県内の中学校や高校全体の活性化にもつながっている。

図表1 18歳人口と進学率の推移

| 年度 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 |
|------------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 18歳人口(人) | 16,020 | 15,312 | 14,739 | 14,542 | 14,501 |
| 大学等進学率(%) | 51.2 | 52.2 | 49.5 | 49.7 | 54.1 |
| 地元大学進学率(%) | 32.6 | 32.1 | 32.6 | 31.5 | 31.8 |
| 地元短大進学率(%) | 68.5 | 66.6 | 69.6 | 70.5 | 71.1 |

※学校基本調査報告書を基に進研アドが算出。
※大学等進学率には、大学・短大の通信教育部への進学者を含む。過年度卒業者を含まない。
※地元大学進学率、地元短大進学率には過年度卒業者を含む。